

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 25 年度
氏名	庄 小蘭	指導教員	池田 広子

論文題目	<b>日本語学習者の学習ストラテジーの考察</b> <b>—JFL 環境の中上級中国語母語話者を対象として—</b>
------	---

### 本文概要

#### 1. 研究目的と背景

本研究は、JFL 環境の中上級中国語母語話者を対象に、どのような学習ストラテジーを使用しているのかを追究したものである。具体的には SILL (Strategy Inventory For Language Learning, Oxford 1990) の質問紙を使用し、中国の大学の日本語学習者 (100 名) を対象に調査を実施し、(1) 学習ストラテジーの傾向、(2) 属性要因とストラテジーとの有意差、(3) 使用頻度との関係を統計処理によって分析し、考察を行った。

中国の日本語学習者は、日本語学科の新設や既存学科の定員増で学習者数が増加しているが、中国国内でどのような学習ストラテジーを使用しているのか、その実態に関する調査はあまり行われていない。

#### 2. 研究方法

SILL 調査方法 (Oxford 1990) に基づいて、尹 (2011) の調査を参考に、中国語環境において適切な項目を調整した。SILL (Oxford 1990) 質問紙の限界を踏まえた上で、中国の A 大学における日本語学習者向けに中国語に翻訳及び Back-Translation、予備調査を繰り返し、質問紙を精緻化した。実際に回収した質問紙は 100 名 (回収率 91%) であった。

#### 3. 分析結果と考察

第一に、語彙の記憶や読解において学習ストラテジーの頻度が多いことが分かった。会話に関するストラテジー使用も見られることから、近年日本語教育におけるカリキュラムや教科書、教育方針の変化が影響していることが窺える。第二に、学習要因の「心理的態度」、「学習時間」「学年別 (日本語レベル)」と学習ストラテジーの間に有意な差が認められた。「学習時間」については、学習時間が長ければ長いほど、学習ストラテジーの使用が多くなることが確認された。第三に、学習ストラテジーの使用頻度の順として、「認知ストラテジー→補償ストラテジー→メタ認知ストラテジー→情意ストラテジー→社会ストラテジー→記憶ストラテジー」を示した。また、各学習ストラテジーの下位区分について学年間を比較した結果、メタ認知ストラテジーの下位「自分の学習を正しく位置づける」と「評価」に関するストラテジー使用に有意な差がみられた。

さらに、以上の結果を先行研究に引き付けると、韓国人日本語学習者の学習習得する過程で使用する学習ストラテジーの構造と一致した。一方、先行研究と一致しない点は、時間・空間の距離・対象者の数によることが推測される。

#### 4. 今後の課題

教師は学習ストラテジーを学習者に教えることにより、学習者に自律的学習能力と実践的コミュニケーション能力を同時に育成することが可能になると考える。中国の日本語教育現場での学習ストラテジー指導は量的にも質的にもまだまだ不十分である。今回の調査では一般的な傾向を示したが、今後学習者の個人要因を示していくことも必要である。これらを考慮した指導法の具体案を検討していくことが必要である。今後の課題としたい。